

I 研究の経過と概要

1. 本校の教育と研究の歩み

本校における教育活動は それぞれの年代に改訂された学習指導要領や入学してくる子どもたちの重度化・多様化とともに変遷してきた。

昭和40年代は 教育目標が「社会的自立をめざし社会的適応力をつける」ことであったため それに必要な知識を教えること 技能を習得させ慣れさせることが指導の方針となっていた。しかし 50年代に入って本校でも障害の重い子どもを受け入れるようになり 54年度の義務制施行によって 自閉的な傾向の強い子や言語をもたない子など多様な子どもが入ってくるようになったことで これまでの指導の方針を見直す必要に迫られた。

つまり 従来の教育目標や教育課程では 中・軽度の能力の子どもには効果的であったが 重度といわれる子どもには合わない場合も多く すべての児童生徒に対して指導効果を上げることが難しくなったのである。

そこで取り組んだのが 全校あるいは学部単位で行われる「集団学習」である。その一つである全校集会は 障害の程度が重い子も軽い子も また年齢の大きい子も小さい子も一緒になってリトミックやゲームを行うもので 多くの子が集団による学習の中で落ち着きを取り戻し 他の子の活動を見て見通しをもったり 自発的に取り組んだりすることが研究の成果として分かってきた。また このほか小学部では「部朝の会」 中学部では「ハッピータイム」 高等部では「マルチパーパスタイム」などそれぞれの学部で創意工夫をこらした集団学習も考えだされた。

また同じ頃 多様な障害をもった子どもたち とりわけ視線が合わず自分が興味をもったものにしか関心を示さない子どもたちに対して 具体的な指導場面でいろいろな手立てが講じられた。例えば 効果的な教材を用意し学習に見通しを持たせたり 子どもの好きなことや得意なことを学習内容に取り入れて 意欲を引き出したりしながら 学習への参加を促してきた。つまり 学習内容や単元に子どもを合わせていくのではなく 子どもの実態から教材や単元を考えていくことを重視するようになったのである。

こうして より子どもの実態に応じた教育目標や教育課程が必要となり 昭和62年に4回目の教育課程の編成が行われた。教育目標は「その子らしい自己実現をめざす」という内容に変え 実態に即した指導のもと その子の個性を大事にした豊かな人格づくりをめざすことに重点が置かれた。そして 子どもたち相互のかかわりによる集団の教育力に着目し 前述の「集団学習」を教科・領域をあわせた指導の中に組み入れたことも一つの特徴といえよう。さらに これまでの月別の細かな単元配列を改め 学部・学年ごとに習熟すべき基本的な内容を精選してまとめた。これにより 指導者がそのときそのときの多様な子どもの実態に応じて 柔軟な裁量のもとで指導できるようになった。

こうした取り組みの積み重ねが やがて63年度からのプロジェクト方式によるグループ研究へと発展していった。これは 授業づくり 絵本のよみきかせ パソコン ものづくり コミュニケーション 性の指導など教師一人一人が教育実践の中で抱えている問題意

識や課題をもとに研究内容を取り上げ 子どもたちの多様なニーズに応えるとともに 実態に応じたねらいを実現するために取り組んだものである。このユニークな研究体制はそれぞれの教師が専門性や得意な分野を生かして取り組んだこともあり 深まりのある研究が蓄積され5年間継続された。また 子どもたちの学習に対する意欲も高まり 自らの気づきによって課題解決していく姿も見られるようになった。

このプロジェクト方式の研究の後 それぞれのグループ研究の成果を学部やクラスでの指導場面で生かしていきたいとの確認がなされ 次年度より新たなテーマのもと学部単位での研究が行われることが決まった。

2. 研究の経緯

平成5年度より「豊かな心と生活をめざして」という主題で本研究が始まった。この年は創立30周年記念事業のため教育研究発表会は行われなかったが テーマの決定や「豊かさ」のとらえ方などについて各学部または全体場で話し合いがもたれ 平成6年度から具体的な研究実践に取り組んだ。以下 その経緯について述べてみる。

(1) 研究テーマの設定について

研究テーマを設定するにあたっては 本校児童・生徒に対する私たちの願いや子どもたちを取り巻くさまざまな社会情勢などを考慮して決定することにした。その内容については概ね次の通りである。

①本校児童・生徒の実態を踏まえて

まず 各学部で子どもたちの学校生活についての問題点を話し合うことによって 研究テーマの方向性や視点を見いだすことにした。その話し合いの中で特に多かったのは「こだわりがとれず いろいろな状況に対応することが難しい子をどう指導するか」「教師とかわかることはできても子ども同士のかかわりが弱い」「能力の高い子でも 廊下を行ったり来たりするだけで目的的な行動がとれない」などであった。これらのことから 小学部では「見たり聞いたり触ったりする様々な活動を通して 学習意欲を喚起させ活動そのものを楽しませること」 中学部では「これまでのグループ研究の成果を生かしながら 子ども同士の豊かなつながりを深め集団の中で共に生き合うことをめざした取り組みを進めること」 さらに高等部では 卒業後も生きがいをもって生活できるようにとの願いから「余暇の時間を有効に利用し主体的な態度を身につけること」を今後の方針とした。

このように 各学部の児童・生徒の実態を踏まえた課題を集約し 研究テーマにつなげようとしたわけである。

②教育や福祉における社会的動向を見つめて

1980年の国際障害者年を契機としてノーマライゼーションの理念が広まり 近年ではQOL (Quality of Life) バリアフリーなどの言葉が盛んに使われるようになった。まだまだ言葉ばかりが先行している感も否めないが このことは福祉に対する社会の関心が高まってきた表れであり 障害をもった人々が 思い通りに自分のニーズを満たし生活を充実させることができるような社会の実現が望まれてきていることを示している。障害児教育においてもこうした社会情勢に呼応して 今までの方針を転換させていくこととなった。

これまで できるだけ社会自立・社会適応できるようにと生活に根ざした知識・技能を教え慣れさせる指導が行われていたが 障害の重度化・多様化に伴い 子どもの実態に即した教育課程の作成が必要となり 一人一人の個性に合わせた指導を重視するようになったのである。本校においても その重要性は早くから認識され現在「一人一人の全面的発達を促し その子らしく精一杯生きる力を育てる」という教育目標のもとで教育活動が行われているところである。

そのような中 平成元年改訂の学習指導要領には「自己教育力の育成」「個性の尊重」などが提唱され 「新しい学力観」として 知識・技能ばかりを習得することよりも「生きる力を養うこと」が強調されることとなった。つまり 障害児教育においては 障害をもった子供たちも生活の主体者であり 自分の生活を自ら決定し自己実現へ向かっていけるような力を身につけることを主眼とするようになったわけである。さらに いずれは学校週五日制が完全実施され これまで以上に彼らの生活の豊かさや質が問われることになるであろう。これらのことは QOLと深く関連しており 今後の障害児教育分野の研究において大切なキーワードとなると考えられる。

以上のように 本校児童・生徒の実態や教育・福祉の社会的動向を考え合わせることで見えたきたことは これからの障害児教育は「その子の個性を大切にしながら豊かな心を育てることで その人間性全体を伸ばし 周りの人たちと楽しく豊かな生活が営めるように支援していくこと」ととらえることができる。そこで平成5年度から新しく取り組む研究テーマを「豊かな心と生活をめざして」と決定し 実践・研究を進めていくことになったのである。

(2) 昨年までの研究の経緯

研究1年目は テーマについての基本的な考え方を明らかにするとともに 各学部の研究内容を具体化していくための話し合いが行われた。「豊かさ」のとらえ方は個人によってさまざまであり 一言で定義づけることは難しい。しかし 人は社会的存在であり人とのかかわりなしで生きてはいけない。多くの人々とかかわり ともに喜び ともに悲しむといった感動を体験することが「豊かさ」につながり それが人間らしさの大きな柱であると考えた。

そこで 研究2年目は 「豊かさ」を「人とのかかわり合いの中で人間らしく生きること」ととらえ本校の教育活動の特色である「集団学習」を中心に据えて実践を展開していくことにした。すなわち 小学部では「部朝の会」 中学部では「クラス集団ごとの散歩学習」 高等部ではマルチパーパスタイムの一つである「挑戦学習」が研究の対象となったのである。さらに 研究3年目は中学部・高等部において散歩や公共施設を利用した学習の中で子どもたちのつながりを大切にすると同時に 子どもの意欲や個性を大事にしていきたいと願って実践を進めた。つまり 人とのかかわりにとどまらず その子なりの行動や考え方を尊重して その生活自体を子ども自らが豊かにしていくような手だてを模索したわけである。したがって「豊かさ」のとらえ方も「人や自然や社会とのかかわり合いの中でその子らしくのびのびと生きること」と改めることになった。

以下 これまでの各部の実践について簡単に述べる。

表 I - 1 昨年までの各部の実践の概要

	平成6年度	平成7年度
小学部	<ul style="list-style-type: none"> ・歌 リズム ゲーム 造形活動を行う「部朝の会」を実践の場とした。 ・活動に季節や色に関するものを取り入れて季節感を味わい その季節に応じた生活に気づかせたり 友達とのかかわりの中で活動そのものを楽しむことをねらいとした。 ・研究対象児を低学年 中学年 高学年から二人ずつ選び 学習場面での変容や学級の友達とのかかわりの様子などについて考察した。 ・指導の結果、言葉のひびきや素材に興味をもって学習に集中したり授業で行った遊びを休み時間にも友達と一緒にしたりするなど「意欲・かかわり」の面で子どもの変容が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き「部朝の会」での取り組みを研究していくこととした。子どもたちの集団を縦割りにしてリーダー性を発揮させたり グループの中で協力させたりして一層子どもたちのかかわりを豊かにしていこうと考えた。 ・赤 白 黄 青の四つの縦割りグループを編成し「グループの友達と一緒に参加する」「グループの仲間を意識する」などそれぞれの集団の実態を踏まえグループの目標を設定した。 ・学級でのかかわりに加え 低学年の子や高学年の子が互いに相手のクラスへ遊びに行くなど 子ども同士のかかわりが広がった。所属意識や仲間意識を深めることができ 高学年の子の中にリーダーとしての自覚がめばえた。
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・体力の向上のためや校外学習のような散歩にとどまらず 身近な自然や社会を実際に体験し 子どもなりの発見や子ども同士のやりとりなどを大切にしたい散歩の取り組みを考えた。 ・1年生は「仲間を意識する」2年生は「仲間と共に楽しむ」3年生は「仲間と共に考える」を散歩の目標とした。 ・1年生は散歩を楽しみ感じたことを声や表情で表し仲間や教師に伝えることを重視。2年生はデパート 図書館 病院へでかけた。3年生は米づくりをテーマに散歩を行った。 ・「散歩学習」は生徒一人一人の課題を見つめ 何を発見させたいのか何を感じさせたいのかを十分教師が把握しなければならぬことの大切さを教えてくれた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・散歩への取り組みは将来子どもたちが一人で散歩できるようになることをめざすのではなく 子供たちの発達を促すための一手段として考え研究を進めた。 ・散歩の形態には「ぶらり散歩」と「目的散歩」がある。また 自然との関わりを重視した散歩 街や社会との関わりを重視した散歩 リーダー主導の散歩 バス・電車など乗り物を利用する散歩などがあり その場その場での教師のアプローチのしかたや手だてがあることが明らかになった。 ・散歩を教育課程の「生活」の一単位としてとらえ カリキュラム化していくことについても考慮した。

	平成6年度	平成7年度
高等部	<p>・挑戦学習</p> <p>皮むき・けん玉・洗濯・漢字の読みなど教師が生徒の実態を考慮していくつかの課題を提示する。その中から生徒がしてみたいと思ったものを選択し練習してそれを発表し審査を受けるという活動である。課題には知識に関するもの 手指を使うことに関するもの 運動に関するものなどがあるが 日々の生活に必要な力を育むだけでなく 余暇に楽しむことができるような課題を考えた。審査は緊張感が伴い不合格の生徒は再度練習して審査に挑戦しなければならない。</p> <p>それだけに 合格の喜びは大きくこれが生徒の自信につながり挑戦学習の後 さまざまな面での生徒の成長が見られた。また 課題を楽しみとして審査後も続ける生徒も少なくなかった。</p>	<p>・ほんもの学習</p> <p>挑戦学習だけでは卒業後の豊かな生活のための指導としては不十分と考えられた。そこで ボウリング カラオケなど 学校生活ではあまり経験させることができなかった活動を積極的に取り入れ 公共施設など実際の場所へ行って活動する「ほんもの学習」が始まった。</p> <p>・レクリエーション学習</p> <p>多くの人数(学部単位)で行う活動も大切であると考え ウォークベースボール エアロビクス フォークダンスなどを行った。</p> <p>・挑戦学習 ほんもの学習 レクリエーション学習は相互に関係を持って機能している。こうした様々な活動の積み重ねが生徒達の心と生活を豊かにすると考えられ 今後も継続的にこれらの取り組みを行っていくことが確認された。</p>

3. 今年度の研究の概要

(1) 研究の目的と方法

今年度は これまでの研究を生かして さらに子どもたち自身でかかわり合ったり 自己決定・自己選択したりしていく姿を求めていくことにした。そして そのための学習内容 学習形態 方法・手だてなどを明らかにしていきたいと考えている。

研究方法については 全体研究会の場で子どもたちの「豊かな心と生活」のとらえ方について再度確認し合い 昨年同様 各学部の「集団学習」における実践の中で 実態に応じた具体的取り組みを行っていくこととした。そして各学部の研究会において検討・評価をしながら進めていくこととした。なお 研究体制については次の通りである。

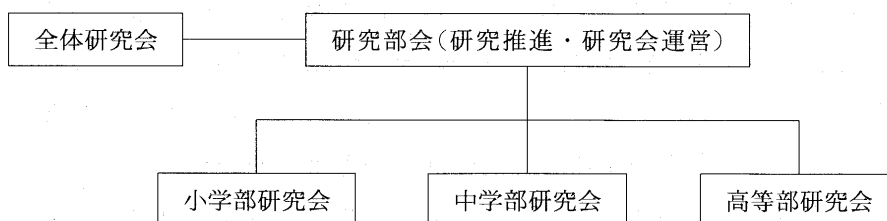


図 I - 1 研究体制の構造

(2) 「豊かさ」をどうとらえるか

障害をもった子どもたちの「豊かな生活」について考えてみると 第一に人とかかわることが難しい子が多いことから まわりの先生や友達とのコミュニケーションがとれるようになることがあげられる。それは言語的かかわりだけでなく 非言語的手段においても相互に気持ちを伝え合い そのことが喜びとなる経験を増やすことが重要である。また人とのかかわりがすぐには難しいという場合には 物を介してやりとりができるような場面で相手を意識したり自分の要求を満たしたりできるようにすることも必要である。第二にさまざまな体験を通して学んだことを自分なりに発揮しながら 意欲的に行動したり新しいことに挑戦したりして さらに経験を広め深めていくことができるようになることが「豊かさ」につながっていくと考えられる。例えば ある程度教科学習が可能な子については 国語や算数で学んだことを実際の生活場面で発揮してみたり 物を作ることが得意な子は工作や実習においてその才能をさらに伸ばし素晴らしい作品を作ることなどがあげられる。こうしたことは 一言でいえば自己表現をめざすことにほかならず 人や物とのかかわりを通して経験を深め 自分らしい生き方をしていくことが「豊かさ」ととらえることができる。そこで 昨年度の「豊かさ」のとらえ方におけるニュアンスを少し変えて次のようにまとめてみた。

「豊かさとは さまざまな場面で物や人とかかわり合うとともに 自分らしさを発揮しながら のびのびと生きること」

ここでいう「さまざまな場面での人や物とのかかわり」とは 遊びの場面 学習場面などにおいて子どもたちが自分以外の対象にはたらきかけ それに対する認識を深めるとともに 自らの精神世界を広げていくことを意味している。また「自分らしさを発揮して」とは 人や物とかかわることで形成された自己を個性として発揮し 自発的・創造的に行動し喜びに満ちた質の高い生活をおくることを意味している。

(3) 「豊かな心と生活」の構造

「物や人とかかわり合うこと」や「自分らしさを発揮すること」が豊かな心と生活につながるとすれば その構造はどのようになっているのであろうか。人は家庭・学校・社会自然などの環境の中で生活し さまざまな事柄を経験している。物や人とのかかわりを楽しみ ともに協力し合ったり共感し合ったりする中で 相手を意識し信頼し自分自身をみつめていく。このように まわりの環境と相互にかかわり合いながら 経験を積み重ね広げていくことが豊かな生活につながっていくものと思われる。また その過程で「自分でできることは自分でしよう」「頑張ったねと誉められたからまた頑張りたい」など自ら体験したことを踏まえて行動を起こしたり 他者とのかかわりをもとに自分の気持ちを決定したりして まわりの環境との調和を考えながら生活できるようになっていく。こうした自分自身に対する意識の変化や自我の成長とあわせて情緒や情操も発達し豊かな心が育まれていくと考えられる。そして この豊かな心は「自分らしさ」とも密接な関連をもっている。子どもたちは 様々な経験を通して自分なりの考え方や表現方法により自分らしい行動様式や生活の仕方を身につけていく。新しいことに挑戦したり自信に満ちた行動をとったりできるのは やはりその子の個性が生活にいかされ より一層意欲的に取り組み

るようになるからである。もちろん その自分らしさが一人よがりのわがままなものに根付いているとしたら 当然改善していかなければならないことは言うまでもない。

ところで 子どもが自分らしさを発揮して生きていくためには まわりの人達がその子の個性を認め受容することが前提となる。自分の行動・態度が人に喜ばれ受け入れてもらえることによって初めて自分らしさを思う存分発揮できるのであるから 教師側のかかわり方を考察するとともに子どもの意識や行動を分析しその変容を正しく評価していくことが大切ではないだろうか。

自分自身に対するイメージをもつということは知的な遅れがあり言葉をもたない子にとっては難しいかもしれないが 内言語を有し人とのかかわりを求めることができるなら 成長とともに自分の気持ちや行動を調整して自我を発達させることも可能と思われる。

これらのことはまだ仮説の域を越えていないが 私たちは「豊かな心と生活」について 以上のように考え 次のような構造図であらわしてみた。

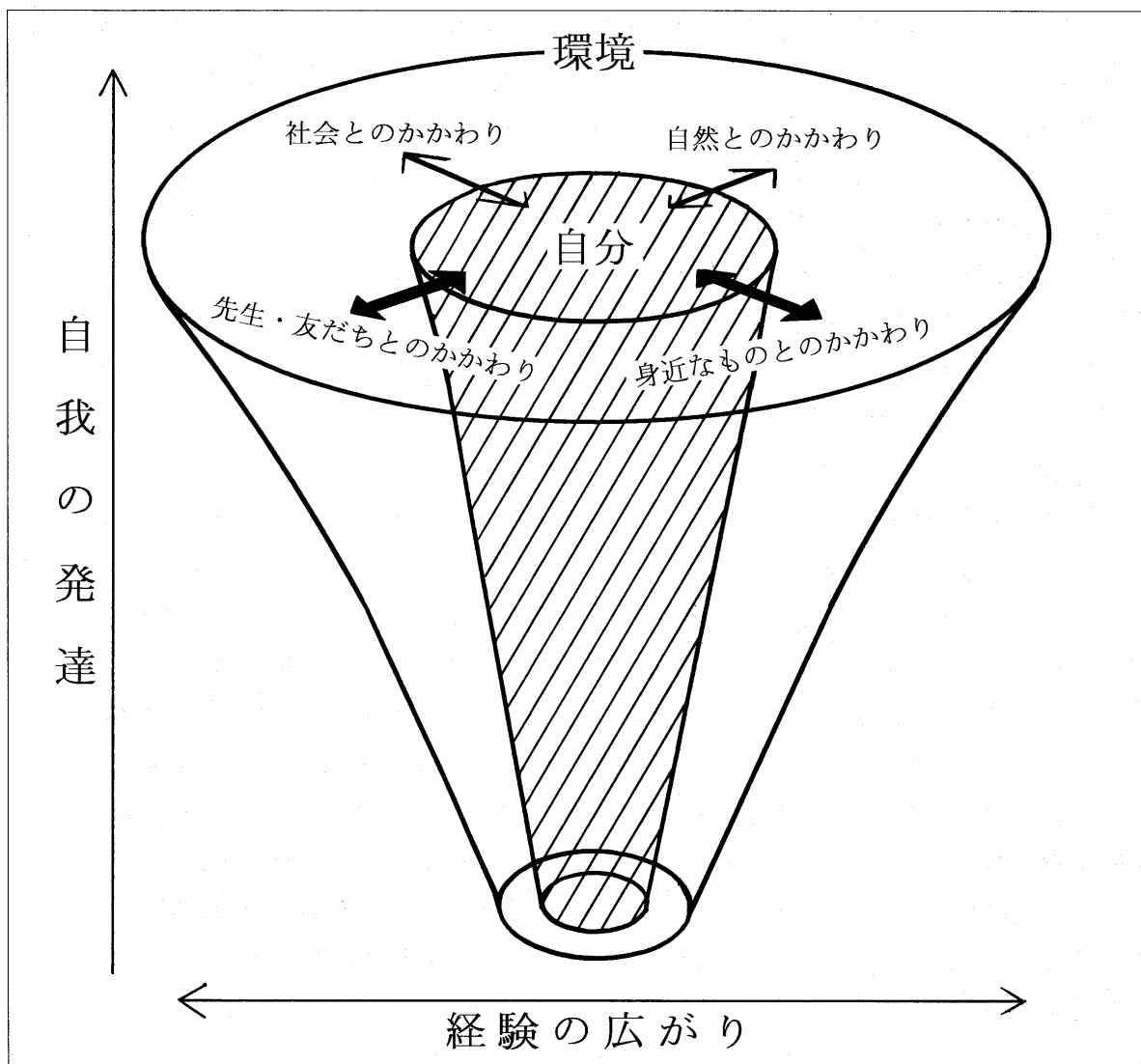


図 I - 2 豊かな心と生活の構造図

(4) 各学部の研究の概要

①小学部

小学部では「豊かな心と生活をめざして」のテーマ設定以来 一貫して学部集会「部朝の会」(今年度より「ランランタイム」と改名)を実践研究の場としている。

昨年度は「人や物とのかかわり合い」と「その子らしさ」の二つの視点から「部朝の会」の活動内容を検討した。

この実践を振り返る中で「子ども同士のかかわり合いが育ちにくい子」への対応が課題としてでてきた。

今年度は「子ども同士のかかわり合いが育ちにくい子」への対応と「その子らしさ」を見つけ いかす指導の在り方を検討することにした。

②中学部

散歩学習の取り組みにより 働きかけが一方的だったり受けとめ方が弱かったりという実態がみられた子どもたちも 自己選択・自己決定を迫られるさまざまな状況を経験する中で 仲間を意識しともに考え合う様子が多くみられるようになった。この散歩学習で自然な形で子どもと子どもがつながり かかわり合う姿を確認できた。ところで 子どもが成長するのは子ども自身なのであるが その成長が質的な高まりをともなったものとなるためには 人との豊かなかかわりや充実した生活が保障されなければならない。その子どもにとっての豊かな学校生活づくりが私たちの課題とも言える。そのために 私たちは教育環境や教育条件を整備し子どもを援助する立場をとりながら 子どもたちが発達する手だてを考えていかねばならない。中学部では 子どもと子どもをつなぐ豊かな学校生活づくりがどのように展開されるべきかを検討し 子どもが質的に高まっていく過程などについて見ていきたいと思っている。

③高等部

高等部では指導にあたって 常に卒業後の生活にいかすという目標がおりこまれている。たとえば「実習」や「生活」の学習を通して社会や家庭でよりよい生活が送れるように必要な知識・技術を学ばせ望ましい態度を養う指導がなされている。しかし これらの指導だけでは「豊かな生活」を送るには十分であると言い難い。学校卒業後は自分で自分の生活を考え 豊かなものにしていく必要がある。そのためには卒業までに多くの経験をし 生活における多くの選択肢を持つことが重要であると考えられる。自分で判断し責任を持って行動できるように自己選択・自己決定する力を身につけることが大切である。同時に既知の体験や既習の知識を生かして未知のことに挑戦していく姿勢こそ必要と考える。

高等部では早くからこうした点に着目し「挑戦学習」という独自の時間を設けて実践を重ねてきた。昨年度は「ほんもの学習」という新しい指導形態に取り組んだ。生徒たちはより豊かな関わりと新鮮な体験を楽しむことができた。

その中で今年度は この「ほんもの学習」について指導内容や方法などを確かなものにしていきたいと考えている。

(河合利秋 新保利久 能岡晶子 荒木敏彦)